

して餘録として頼んずることの出来ないものである。

要するに本書はルネサンス及びバロックに關してすぐれた見解に富むものであつて、多くの人々の熟讀玩味をすゝめたい。

(文藝春秋社 定價四圓) (聽見高年)

都市國家と經濟

ハーゼプレック著
原隨園、市川文藏譯

我國が直面する現實の事態は、皮相な表面的觀察を以て足れりとせぬ限り、ヨーロッパの實體の誤りない把握こそ我々にとつて喫緊の要務たる事を示して餘りあるのであるが、ヨーロッパ文化の濫觴が正にギリシヤ世界にあり、ギリシヤ精神こそヨーロッパを動かす原動力を形作るものであるからには、現下、ギリシヤ的存在の正しい理解が、單なる學的領域を越えて廣く一般に要望されるのを見るは、蓋し當然と言ふ可きである。此の秋に當り、古

代經濟史家として令名高き Hasbroek 教授の "Staat und Handel im alten Griechenland" 1928 が、本邦ギリシヤ史學の至寶たる原先生の手により、市川文學士協力の下に、こゝに其の彫琢の譯業成り、史學叢書の一として公けにされるに到つたのは、唯に學界を裨益するに止まらず、一般人士に親しく此の名著に接する機會の與へられたるを思ひ、誠に喜ばしい限りと言はねばならぬ。

抑々古代經濟史研究の中心問題が古代における資本主義經濟の問題である事は、こゝに改めて説くを要せぬ。古代資本主義問題の最初の提出者たるカール・ビュッヒャー、ワイルヘルム・ロッシ

ヤー一派の國民經濟學者は、其の經濟發展段階理論に基き古代世界に封鎖的家内經濟なるレッテルを張り、何等怪む所なかつたのであるが、これに對し、其の抽象性を指摘し歴史家としての立場より古代ギリシヤ世界に既に資本主義經濟の發展せるを主張したのが、古代史家エドワード・マイヤーであり、ギリシヤ世界に近代的資本主義經濟社會を認める點においてペールマンも亦マイヤーと同類である。ビュッヒャー一派の所論が、歴史的事實を無視した抽象性の故に、今日では既に過去の遺物に屬する事は周知の如くであるが、マイヤー、ペールマン等の主張も亦、古代社會の現象を近代的概念を以て測らんとする傾向著しく、これ亦非歴史のたるの誹りを免れぬ。こゝに、近代化的解釋態度を排し、具體的な事實の探究に立脚し、以てギリシヤ經濟狀態の眞相を明かにせんとしたのがハーゼプレック教授である。

教授は本書を、第一篇商人、第二篇ヘレニズム時代以前の貿易、第三篇國家と貿易、の三篇に分ち、其の各篇において詳細緻密な實證的研究を基に、ギリシヤ經濟が決して近代的な意味での資本主義經濟に達して居らず、ギリシヤ商業は寧ろ無資本的商業であり、商業の目的も企業的であるより家計的である事を明かにした。彼は、ギリシヤ經濟に高度の發展段階を認めんとする主張は、歴史的過去を評價するに現在の基準を以てする非歴史的態度であると難じ、過去の事象は過去そのもの、基準を以て測る可しとの歴史的態度の重要性を強調した。しかも彼は、これを理論によつて説かず、歴史探究の過程そのものにおいて身自ら範を示したの

である。本書において、我々の關心を捉へるものが、唯にギリシヤ經濟に關する其の透徹せる見解に止まらず、物事を歴史的に觀察するには如何ある可きか、を教へる本書の歴史主義的觀察方法そのものにある事は、原先生が卷首に附せられた解説に指摘せられた所、我々の正に注目す可き點であらう。

所で、こゝに言へる原先生の解説は、二十頁に満たぬ極めて簡潔な小篇であるが、私は特に一般の注意を惹き度いと思ふ。何故ならば、こゝに吐露せられた先生のギリシヤ史學に對する總著の一端は、ギリシヤ經濟の全貌を眼前に彷彿たらしめて餘す所がない。先生は、本解説において、經濟史敘述の陥り易い理論的抽象性を排されつゝ、豊富なザツハケントニスより自ら流れ出るギリシヤ經濟の概括的把握を極めて平明に述べられて居る。本解説を讀めば一般人と雖も、ギリシヤ經濟の相貌を捉へるに難きを覺えぬ。加ふるに譯述も亦極めて明快である。一般教養人に切に播讀を御奨めする次第である。(創元社發行・史學叢書・定價圓貳拾錢)(兼吉正夫)

國防地政學

岩田孝三著

近年の出版界に於ける地政學の登場には正に華々しいものがあつた。此の新たな登場者が時代と國家の要望に應じて現れた事は確かであるが、その華々しさの故に流行兒の風貌を持たされ、その爲に多くの潮流がその波に乗つて來たのである。従つて現在日本で地政學と呼稱せられるものは決して單一の内容を意味して

ゐない。それは明かに地政學の若さがその概念の中に挾雜物の席を占める間隙を許してゐるからであらう。もつと端的に言へば地政學の何たるかに就いて所謂地政學者が各人各様の旗を翳してゐるのである。その中にあつて著者陸軍經理學校教官、岩田孝三氏はどのやうな立場を取つてゐられるのであらうか。氏が昨春朝日新講座の一冊としてものされた「地政學」によれば、一應翻譯地政學者の誤謬を踏み廻つて日本の地政學の樹立を目指して居られる事に注目し度い。然し乍ら尙それは日本の傳統的地盤の上に立つ地政學ではなく、「獨逸地政學に、一應の方法、論理、目的を借りねばならないのであり、その地政學的究明の基礎を『血と地』の生命的結合所産を檢討し」て行く事に置かれ、以て日本民族の「所濱に係はる諸政治問題を分析し、指導して行く」事を目的として居られるのである。獨逸地政學からの脱皮には深く敬意を表しなればならぬにしても、日本の地政學を唱せられ乍ら觀念に於いて獨逸的地盤に立つが如き矛盾はも早ないであらうか。そのやうな日本の地政學が樹立されるといふ現象の地政學的解明を企てるならば、そこに割り切れぬものを見出し得るであらう。

此の『國防地政學』に於いても同様な立場に立つて居られる。本書の序文に「國防地政學」が日本文化の世界的光被といふ皇戰に關する研究たるべきを述べられ、第一章にその戦ひが専ら總力戰として考へらるべき事を述べられてゐる。第二章、第三章に「血と地」の生命的結合を考究せられ、日本民族を中心に各民族性の成立に及んで居られる。その民族性と土地の位置的性格とから、